

### 第3回研究コンクール“身近な環境をみつめよう”

## 最終研究報告会を開催

第3回研究コンクールは、1983年の10月に公募を開始して以来、既に3年が経過している。昨年11月29日(土)には、研究奨励賞10グループによる2年間にわたる研究の最終的な成果報告が国際文化会館・講堂(東京・六本木)にて行われた。

報告は、「南部の味と暮らしの環境を考える会」を皮切りに以下、「水系環境を考える会」、「やほ耕作団」、「アジメドジョウ岐阜県調査会」、「愛知の産業遺跡・遺物調査保存研究会」、「リフォーム浜校区研究会」、「都市鳥研究会」、「上野の緑地環境研究会」、「杉十小・学校環境研究会」、「とやまの雪研究会」の順に、午前10時から午後5時半までみっちり行われた。報告内容は——事前に実施したインタビューでも感じられたことであるが——どのグループについても大変聞きごたえがあり、研究後半1年間でのチームの飛躍ぶりがうかがわれた。

本報告会は、『研究奨励特別賞』の選考も兼ねるため、選考委員からの質問や意見にはかなり手厳しいものもあったが、それだけに緊迫した密度の高い質疑応答となった。また、第4回コンクールで本研究助成対象として研究をスタートさせたばかりのグループからの出席もあり、全体的に活気あふれる会となった。

これらの報告内容および、その後提出された研究報告書をもとに選考が行われ、最終的に“特別賞”が決定するのは3月中旬以降である。次号では、その結果をご紹介します予定である。

研究報告を行う明峯さん(やほ耕作団・代表)



### おもな内容

- ◆ ハークラブ総会に出席して…………… 2
- ◆ 地理的拡大と国境を越えた研究活動…………… 3
- ◆ 第19回国際鳥学会議・オタワ大会に出席…………… 4
- ◆ 保健医療の法と倫理に関する国際会議に出席…………… 5
- ◆ 研究助成申請者の声から…………… 6
- ◆ 新刊紹介、他…………… 7
- ◆ 最近の報告書から、他…………… 8

#### ● 林専務理事、ハークラブ総会に出席

ハークラブ(ヨーロッパの主要な財団の幹部25名から成る個人の集り)のコレスポンディングメンバーとして名を連ねている当財団の林雄二郎専務理事は、昨年10月29日~31日にかけてイスラエルのエルサレムにて開催された第27回総会に出席した。(P. 2 参照)

#### ● 助成財団資料センター、“会員の集い”を開催

昨年11月21日(金)、同センターの設立1周年を記念した「会員の集い」が国際文化会館・講堂にて行われた。会員団体の関係者等およそ100名の出席があり、盛会となった。(P. 7 参照)

#### ● 第23回研究報告会を開催予定

高度に技術化された社会においては、災害や事故の発生に対して、ヒューマン・ファクターがますます重要になってくると考えられる。しかし、技術の進歩の割には、その防止のための社会的な安全システムの確立には大きな立遅れが見られるのが現状である。

今回の報告会では、「高度技術社会における安全管理システム」をテーマに、最近とりまとめられた2件の助成研究について発表し、関係者とともに、技術と人間と社会の連鎖する問題として、将来の安全管理システムを検討し、さらに具体的な実現の可能性についても展望したいと考えている。

申込み方法等については、P. 8に掲げた通りであるが、多くの関連する専門分野の方々の出席を期待している。



## ハーグクラブ総会に出席して

トヨタ財団専務理事 林 雄二郎

ハーグクラブの1986年の総会は、10月29日～31日にかけてイスラエルのエルサレム（因みに現地ではイスラエルのジェルサレムという）で開かれた。開会にあたり大統領とメンバー一人一人が交歓をしたことは恒例の通りであったが、それはさておき、私が今度の会議で強い印象を持ったことが幾つかあったが、そのうち二つのことについて紹介しよう。

### ◆思い知らされた契約社会における約束の大切さ

その第1はメンバーシップの討議である。私は予め郵送されてきた課題の中に、“メンバーシップ”というのがあったのに興味をひかれた。もっとも、日本での各種の組織の総会でも、入退会者の承認をすることは恒例のことで、そのこと自体は別にどうということもないのだが、面白かった——などと言うのは少々気がひけるが——のはその討議ぶりであった。まず、欠席者の確認が行われ、欠席者から予め届けられていた手紙の披露が行われる。いずれももっともな理由ばかりである。例えば、「わが方の財団の創立〇〇周年の式典とかち合うので」といったようなことである。ところが、そのような手紙の披露が終ると、議長が、「以上のようなことであるが、これらの方々の会員資格を今後も認めるべきかどうか」ということを正式に議題として取り上げるのである。むろん、このように理由のはっきりしている人達は意義なく会員として存続することを認められはしたものの、それは正会員のみならず、コレスポンディングメンバーも同じレベルで審議の対象にされる。コレスポンディングメンバーの一人にスイスの某氏がいたが、彼は無届け欠席であった。除名すべきではないかとの提案があった。その時に「ユー・ジロウのように——クラブのメンバーは常にファーストネームで呼び合うことになっているのだが日本人にはこれはどうも違和感がある——日本からはるばる来ている方に対して、これでは申し訳がたたない」と言われたのにはどうも面映い気がしたが、結局、「来

年の総会はスイスのローザンヌだから、もし、この時にまた欠席するようだったらその時には断固除名してくれても良い」というスイスのネッスル財団の方の助け舟が効を奏して首はつながったものの、私はヨーロッパ人達の——というよりも、いわゆる契約社会における約束の重要性を思い知らされた。日本ではこのような厳しさは無い。余程のことがない限り、マアマアというのが通例であるが、これは日本人として今後十分に考えておかなばならないことではないだろうか。

### ◆“隣人を知る”ことの厳しさ・難しさ

もう一つ、今度の総会のテーマは『異なる価値観の共存のために財団はどのような寄与ができるか?』ということであったが、たまたまイスラエルが舞台であったこともあり、アラブとイスラエルとの共存について幾つかの報告が行われ、激しい議論がなされた。トヨタ財団では、かねてより行ってきた「隣人をよく知ろう」翻訳出版促進助成プログラムの経験もあることだし、場合によっては何か貢献できるのではないかとも思ってこの総会に臨んだのであるが、それはとんだ思いあがりだったことを思い知らされた。というのは、アラブとユダヤとの共存という問題は日本人にはとても想像もつかない深刻さを持った問題であって、この深刻さの前では私達の経験など、まるで子供のママゴトのようなものでしかない。何しろ何千年来、同じ土地を双方とも、これこそ我が土地と堅く信じて疑わないのだから、その心境はとても日本人には及びもつかないものである。「私はイスラエルの市民であることは認めるけれども、私の国籍はイスラエルではなく、パレスチナである」と公然と言って胸を張るアラブ人の心境を、今日、一体幾人の日本人が正しく理解しているであろうか。会議の始まる前に、ヘブライ大学などを訪ねて、ユダヤ人の教授たちからも話を聞いていた私であったが、聞けば聞くほど、この彼等の心を日本人たちがどれ程理解し得るのであるかとの疑問が私の胸の中に大きく広がるのであった。そして、このアラブとイスラエルとの間の「隣人をよく知ろう」プログラムをファン・リア・エルサレム財団などが真剣に進めていることを知って、私達のプログラムに対しても改めて謙虚に思い直すことの必要性をしみじみと思ったものであった。



## 地理的拡大と国境を越えた研究活動

—本年度の国際助成部門の助成から—

国際助成部門 プログラム・オフィサー  
若山佳子

前号で既に掲載されている通り、「国際部門で実施している二つの助成——国際助成と「隣人をよく知ろう」プログラム——については、本年度の助成対象が決定しているわけであるが、ここではその助成の特徴について概説してみたい。

### ① 国際助成の地理的拡大

本年度の国際助成の採択件数は51件で、国別の内訳は、フィリピン19、インドネシア15、タイ9、ネパール5、ベトナム3となっている。これからも明らかのように、ここ数年来、タイが中心であった国際助成の傾向に変化が生じ、地理的な拡大が行われた。これは、タイでの助成活動が一応のレベルまで行われたことや財団側の判断に基づいたプログラムスタッフの活動に伴う意図的な変化である。

助成対象の内容を見ると、国際助成の全体的なプライオリティは、「固有文化の保存と振興」であるが、その実施にあたってはそれぞれに国の状況が反映されて、各国ごとに特徴が見られる。

フィリピンでは、外国人によるフィリピン史研究は行われてきたが、フィリピン人の目から見たそれは少なく、同史執筆の基礎となる地方史研究が本格的に始まろうという時期にきている。そのため、助成対象のプロジェクトも、地方史研究および古文書資料の整理など、この種の研究のインフラストラクチャーづくりが多くなっている。19件のうち9件は地方史に関するもので、対象地域も、イロコス、パンガシナン、レイテ、ネグロス、ダバオ、南コタバドと広範囲がカバーされている。フィリピンではその他、多様な民族国家であることを反映して、地方の文化、言語、文学の研究が助成対象と

なっている。

インドネシアでは、やはり地方史の研究が大きな比重を占める他、地方文化、言語の研究が助成の対象となっている点はフィリピンと同様であるが、ここに新しい試みが実験的に行われている。それは固有文化の保存・振興のプライオリティを拡大解釈して、近代化の中での伝統文化の変容過程、近代化への文化的、社会的対応などのテーマのプロジェクトが助成対象となっていることである。北アチェおよびメダン市でこれらのプロジェクトが行われている。

### ② 国境を越えた研究活動

本年度の国際助成のもう一つの特徴は、東南アジアの国境を越えた研究活動への助成が増えたことである。この種のプロジェクトへの助成は、固有文化についての研究レベルが他国よりも多少進んでいるタイを核として、今後もう少しずつ増えるものと思われる。

北タイ、ビルマ・シャン州、インド・アッサム州のタイ語族の文化・社会比較の予備的研究は国境に関係なく、タイ語を話し、タイ文化を共有しているタイ族についての比較研究を行うための体制づくりに助成するものである。『ビルマのデザイン』の編集と出版はビルマ人の建築デザイナーが長年にわたって収集してきた同国の伝統的なデザインのコレクションを解説をつけて出版するに際し、タイの芸術大学の研究者が協力し、タイで出版するものである。現在のビルマの状況ではこのような本を出版することは非常に困難であり、タイの研究者の協力なしには実現し得ないプロジェクトである。

グエン時代ベトナム社会・経済史の予備的研究では、タイ人の歴史学者がベトナム史研究を開拓しようとするものである。タイにおいては従来、ベトナム史研究の蓄積はほとんどなく、本プロジェクトは東南アジア諸国間の理解の促進に寄与するものと期待される。東南アジアのイスラムについては、インドネシ

アの研究者が中心となって行われるものであるが、インドネシア各地、マレーシア、シンガポール、タイ南部、フィリピン南部に広がる東南アジアのイスラム社会の比較研究を行うことを目的としている。また、西欧の植民地支配が東南アジアに侵入する以前に、ゆるやかに成立していたと考えられる「マレー・イスラム世界」が、今日までどのように継承されてきているのかを研究するものである。

### ③ 「隣人をよく知ろう」プログラム

本プログラムには、4つのサブ・プログラムがある。①日本向け翻訳出版促進助成は、東南アジアの著書を日本語に翻訳・出版する際の翻訳料を助成するものであるが、現在翻訳の質をどう向上させるかが課題となっており、ために選考の基準は厳しくなり、結果として、助成対象の件数は少なくなっている。今後何らかの形で翻訳の質を高めるためのインセンティブを助成の中に組込むことが必要となってきた。②東南アジア向け翻訳出版促進助成は、日本に関する著書を東南アジアの言語に翻訳・出版する際の助成をするもので、本年度特筆すべきことは、マレーシアの国立国語協会で行われてきた本プロジェクトが、新しく設立された学術振興財団(民間財団)に引継がれたことである。政府主導の傾向の強いこの国で、民間財団がどれほどの仕事ができるかは今後の課題となろう。③東南アジア相互間翻訳出版促進助成は、同諸国相互間で直接本の翻訳・出版を行う際の助成をし、またそのためのインフラストラクチャーづくりにも助成するものである。本年度はベトナムで、昨年から行われている「タイーベトナム語辞書」に加えて、「インドネシアーベトナム語辞書」への助成が決定した。ベトナムの近隣諸国への関心の高まりが反映されている。④東南アジア諸語辞書編纂出版助成では、「タイ日辞典」への出版助成が決定し、近日中には出版の予定である。(P.7参照)



## 好評を得た商船での研究便乗による新知見

——第19回国際鳥学会議・オタワ大会に出席して——

山階鳥類研究所研究部 岡 奈理子

## ◆発表ラッシュの国際会議

オタワ国際会議場は、溢れるような人の群れと、会場のあちこちで繰り広げられる論議で、騒然としていた。1986年6月22～29日に開催された本大会は、参加者1,350名、参加国約70ヶ国と、1902年の同会議始まって以来の大盛況となった。

大会期間中の一週間のほぼ連日、朝8時半から夜9時までの過密スケジュールの中で、千件近くの発表が行われた。内容も、進化、分類、形態、生態、生理、渡り、社会行動等多岐にわたり、また対象の鳥種も実に多様である。まさに発表ラッシュの感すらあった。私は、4年に一度のこの会議に、共同研究者の丸山直樹先生（東京農工大・農）と共に、1982年来の重点課題である海鳥ハシボソミズナギドリ（日本沿岸での大量死の原因解明）に関わる新知見を提出した。

## ◆覆った環太平洋8の字渡りルート

この鳥は、約10年間隔で、春になると日本の太平洋沿岸に大量に死んで漂着する。この大量死の発生年には、衰弱鳥が万羽単位で沿岸漁業に被害を及ぼし、大量死の謎と共に、社会問題化する。1975年からこの問題と取組んだものの、調査は財源の制約から、国内での発生状況の把握、病理解剖、繁殖地タスマニアの研究者との手紙での情報交換等に限られていた。オーストラリア南東部と越冬地の北部北太平洋を往復し、2万km以上を行動範囲にもつハシボソを相手に、時として起こる大量死の原因を究明することは、余りに分が悪かった。

しかし、1982年秋にトヨタ財団の研究助成を得られたことで、大量死の発生メカニズム解明に向けて私達の調査は一挙に本格化した。

斃死鳥が病的にはシロであったため、調査の焦点を大量死鳥の年齢、脂質量の分析に絞った。その結果、大量死鳥の99%以上が生後半の幼鳥であり、残存脂質はわずかに4～5gであった。即ち、日本沿岸での大量死の原因は、その年に生まれた幼鳥の、渡りに伴う衰弱死である。

では、何故日本沿岸で大量死が発生するのか、彼等にとって日本沿海部はどのような意味を持つのか、渡りの主ルートはどこにあるのか。渡りルート調査の必要性が浮上した。

海鳥の洋上調査は、足となる船の確保が可能か否かが勝負となる。私達の調査の主旨と船の必要性とを理解して頂いたトヨタ財団とトヨタ自動車株式会社、及び日本郵船株式会社、川崎汽船株式会社の船会社の計らいで、トヨタ自動車北米西岸向け輸出船への研究便乗が実現した。

タスマニア州政府の研究官も参画した1983年春から1985年秋までの計11航海330日に及んだ通称トヨタ丸での目視調査の結果、ハシボソの成鳥、亜成鳥、幼鳥の全ての渡りコースが確認された。その結果、従来定説とされ多くの書物に登場したオーストラリア・サーペンティー博士の環太平洋8の字渡りルートが覆った。

## ◆新たに始まった国際共同研究

次に、パソコンを使いハシボソの渡りの経済性を分析した。その結果、私達の洋上目視結果である太平洋中央縦断渡りルートが、彼等の渡りにとって“省エネコース”であり、8の字渡りルートは、経済性の悪い迂回コースであることが裏づけられた。つまり、ハシボソは繁殖海域と越冬海域を最短で往復し、日本沿海部は飛翔力の弱い幼鳥の吹き溜り海域であることがわかった。ハシボソの大量死

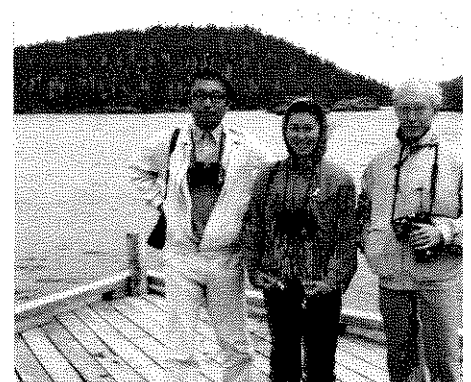
は時折発生し、その周期は約10年である。私達は次の仮説の実証に入った。それは、『オーストラリアでの雛の育成状況が、日本での死亡量に反映する』というものである。1985年、タスマニア州政府国立公園野生生物局との緊密な協力体制の下に、主繁殖地タスマニアでの現地調査を実施した。その結果、雛の成鳥には年次差が予測され、日本で大量死する年には、雛の成長の低下を誘因するオーストラリア南東海域の海洋バイオマスが低下することが考えられた。これを受け、雛の成長と日本での斃死規模の対応、及びハシボソがオーストラリア南東海域の海洋バイオマスの変動指標となる可能性を探ることに焦点を絞り、新たにタスマニア州政府との共同研究をスタートさせた。

◆ ◆ ◆

オタワ会議では、一連の研究成果のうち、「ハシボソの渡りルート」と「栄養生態と大量死」の2報を発表した。本会議に先立ち、同国のキングストンで開催された第19回国際鳥類保護会議海鳥分科会で、ハシボソの研究概要と渡り性海鳥研究の国際協力の必要性と、それが海鳥保護へと繋る視点などを紹介したことも手伝って、発表ラッシュのオタワ会議では、私達の発表への手ごたえある評価が得られ、多くの海鳥研究者との活発な人的交流と情報交換が実現した。

今回のハシボソの渡りの新知見が、従来の研究船ではなく、一般商船の研究便乗で可能となったことを説明した時、会場が湧いたことも付記して学会出席の報告を終りとした。 (当研究の報告書については、P8参照)

ニューファンドランドの国立公園にて (中央が筆者)





## もっと活発化して欲しい学際的な議論や意見交換 ——保健医療の法と倫理に関する国際会議に出席して——

愛知県心身障害者コロニー・発達障害研究所 白井泰子

### ◆ AIDSも議論の対象に

1986年8月17日～21日の5日間、オーストラリアのシドニーで開催されたこの会議は、医療技術の飛躍的な進歩がもたらした種々の問題を学際的な視点から検討し、解決の端緒を見出そうという主旨の下に、アメリカ医事法学会の主催によりアジア・オセアニア地域で初めて行われたものである。これには地元オーストラリアは勿論、ニュージーランド、アメリカ、カナダ、イギリス、ドイツ、フランス、そしてイスラエルやインド、日本から医学・法学・倫理学・社会学・心理学等の専門家やソーシャル・ワーカー、看護婦など300名以上の人々が参加した。

5日間の会議は、午前中が全体会、午後が分科会の形式で進められたが、全体会・分科会ともに、脳死や臓器移植、体外受精に代表される新しい生殖技術、末期患者や重度障害新生児の治療、患者の人権、医療過程、高齢化社会と医療資源の配分、エイズなど極めて今日的なテーマについて議論された。

### ◆ 胎児や新生児は人間じゃない!?

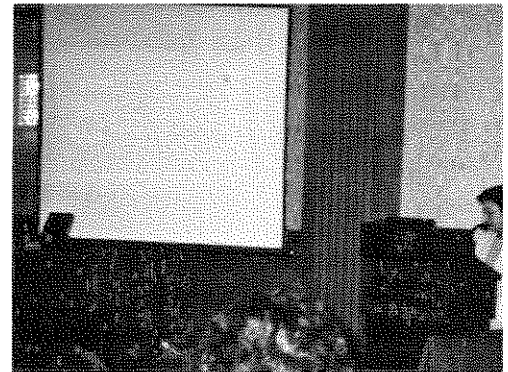
開会式に続いて行われた基調講演の中で、Sir Cowen (オックスフォード大・オリエール・カレッジ学長) は、「現在の医療問題でまず第一に考えられねばならないことは、“健康に対する個人の責任”である。これを前提とした上で、コミュニティや政府に対して“十分な医療資源やより良い治療を市民に保障する義務”が課せられる」と語った。疾病に対する患者の責任を不問とするParsons以来の医療モデルを否定し、個人の健康管理に対する国のパターナリスティックな介入を許容するとも思われるこの発言に対して、「医学および生物医学・行動科

学研究における倫理問題検討のための米国大統領委員会」の主要メンバーであるCapron博士(南カリフォルニア大・法)から鋭い反論が出されるなど、会議は冒頭から熱気を帯びたものとなった。

全体会での講演は、いずれも示唆に富むものだったが、中でも特に印象に残ったのは、「祖父母は死ぬべき?」という挑発的なタイトルで高齢者に対する差別的な医療資源の配分の批判を行ったSomeville教授(カナダ・マギル大)、イスラエルにおける体外受精の現状について報告したShapira教授(テル・アビブ大)、フェミニズムの視点から体外受精など新しい生殖技術に対する批判を行ったRowland講師(オーストラリア・デューケン大)などの講演である。また、「重度障害新生児の延命治療の是非」という講演の中で、現在、体外受精の分野でトップを走っているHelga Kuhse博士(オーストラリア・モナシュ大・バイオエシックスセンター)が、「胎児は勿論のこと、新生児も完全な意味での“人”とは認めがたい。従って、その扱いが成人や小児(Child)と異なっても当然だ」という主旨の発言を行った時には、一瞬、会場は騒然とした。同大学のチームが体外受精の領域で常にトップの座を保っているのは、こうした倫理面でのサポートも一役買っているからだろうかという思いが頭をよぎった。

### ◆ 意外だった多くの質問

午後の分科会でも、全体会に劣らぬ活発な議論が展開された。日本からは、唄孝一教授(都立大・法)など6名が報告を行った。私は、19日午後の分科会で選択的人工妊娠中絶に対する日本女性の態度について報告した。フロアーからは、



分科会で報告を行う筆

こうした問題に関する態度形成に及ぼす宗教(特に仏教)の影響や優生保護法等についての質問が出された。この分科会は、体外受精に関する報告が多かったので、聴衆の反応に多少の危惧を感じていた私にとって、これは本当に嬉しい誤算だった。



日本とシドニーとの時間差は、わずか一時間。オーストラリア全人口の1/4がここに集中していると言われながらも、町全体はゆったりしており、治安は良い。さらに物価も安いことから、近年は観光客が増加している。観光旅行と医療問題、この一見まったく関係のない二つの事柄の底に、地球上の一隅で生じた問題が、直ちに世界の人々の生活に影を落すという問題進行の同時性という共通項の存在を感じた。

この会議に参加して多くの刺激や収穫を得た。その中で今最も強く感じることが二つある。第一は、わが国でも今回の会議で取り上げられた種々のテーマについて、中堅や若手の研究者の間での学際的な意見交換や議論がもっと活発に行われてよいということである。第二には、この領域に関する日本の問題状況についてもっと積極的に情報を提供する必要があるということである。1988年には、ロンドンでこの会議の開催が予定されている。その時には、日本の状況を踏まえた上での問題提起や東洋文化から新しい視点などを携えて多くの人が参加するようになって欲しいと私は考えている。



## 研究助成申請者の“声”から

研究助成部門 プログラム・オフィサー

山岡義典

トヨタ財団の研究助成は、希望者からの直接公募制をとっていることや国籍や資格に一切制限がないことなどの特徴をもっているが、公募にあたって毎年申請者に簡単なアンケートをお願いしている。その質問の一つに「当財団の研究助成の内容や進め方について、ご意見等がありましたらお書きください」というものがあり、毎回、多数の興味ある意見が寄せられる。

それらの意見は、具体的な申請書の改善に関するものから助成のシステムやテーマ設定に関するものまで広範であり、また、私たちのやり方に勇気を与えてくれるものから、反省を迫るものまで多様である。私たちとしてはできるだけ耳を傾けて今後の助成プログラムに反映させるよう努めている。

以下には、昭和61年度の研究助成で寄せられた意見の中から、研究テーマに関するものについていくつか紹介しよう。

### 【学際共同研究を】

・学際的共同研究は、文部省の科学研究費等では、既存の科目別分類に従っているので適当な提出項目がなく、極めて通りにくいし、適切な審査体制もないようである。学際的共同研究の推進は民間団体の研究助成による育成に俟つところが大きい。

・民間の研究助成のテーマの多くが、眼に見える速効性と結び付いた技術系のものに集中する中で、貴財団の助成方針は特筆に値すると思う。「新しい人間社会の探求」というテーマの追求は、あらゆる分野の学問がそれぞれのアプローチから答えていかなければならない問題であるが、しかし、必ずしも答えきっていない（場合によっては答えようとするしていない）問題でもある。学問の本来の機

能を活性化させるという意味において、貴財団が今後ともこうしたテーマを選択されることを希望してやまない。

・問題意識だけが先行していて具体的な方法論がまだほとんど見つからない分野（予備的研究（第Ⅱ種）よりもまだ萌芽的なもの）で方向だけを指定し研究者を募る方式のものを希望したい。長い年月をかけて育てていくようなことも大切だと思ふ。

### 【国際共同研究を】

・官制の研究助成にみられない自由かつユニークな助成内容であることを、多とします。今後も更に国際的共同研究への助成の申を拡げられるよう期待します。

・日本と海外複数の研究機関に跨がる広域研究に対し、貴財団の研究助成の意義が生かされるものと思います。現状の科研費等では、このような広域研究実施に対し全く無力といえよう。（後略）

・現在日本国外には、沢山の日本人が住んでいます。その中には、日本での所属や職歴を越えて地球の平和を願っている人が沢山います。短期の仕事及び研究のために訪れる日本人研究者は、近視眼的なもの見方、個人の研究成果を上げるための研究が多い様に思われます。貴財団の様な自由な発想の力を持っている組織こそ、真の国際的指導者なり研究者を育て得ると思います。国際人の発掘を期待してやみません。

・これまで市民サイドにかかわる課題を多くとりあげていただき、文部省等のものとちがった特徴を出していただき、それに賛意を示します。さらに希望としては国際的な平和問題などのテーマに取り組んでいただけると幸いです。

### 【基礎的、実証的研究を】

・年齢や分野の指定など制限がなく、研究内容のみによって判断される点が非常によいです。しかし、私のような基礎研究をやっているものは、直接的に社会に還元されにくいので、基礎研究の重要性についても考慮してほしいと思ふ。

・助成が独創的で、成果の期待される

研究を対象として実施されるべきことは言うまでもないでしょうが、さらに科学諸分野における基礎的研究の蓄積に通じるような研究への奨励がもっとも望まれます。長い時間と多大の労力を費して実を結ぶような研究こそ、注目されるべきでありましょう。特に社会科学分野ではその学問的鎖国を解体するような助成進路が取られるべきかと思ふ。

・実証研究でなければ国際的に通用しないばかりでなく、真に信頼できる実践的含意も得られませんので、実証研究の経験の有無、実証研究に耐えるトレーニングの有無を、より明示的に問い、この点を研究計画案の内容とあわせて検討下さることが、私自身を含め次世代の実証スピリットをエンジンとする社会科学者の心からの希望と存じます。（後略）

### 【文化、芸術にも】

・（前略）民間財団の助成すべき研究は、一般の人々の、小さな、学問として成立しにくい研究であると思ふ。「新しい人間社会の探求」というテーマには学問ばかりでなく、文化が要となると思ふ。

・最近のさまざまな研究助成をみみると、文部省の科学研究費などにみられるように、一般の研究に重点がおかれ、芸術活動を促進するような補助は、ほとんど皆無のように思われます。（中略）トヨタ財団には、「芸術活動の奨励金」を設け、日本の芸術文化向上の一端を担うような助成をして頂きたいと思ふ。



以上、ランダムに申請者の声を再録したが、ある意味でいずれももっともなことであるが、すべての人の希望を受け入れようとする予算はいくらあっても足りない。また総花的になって民間財団としての特徴を出すこともできない。多くの人の意見を聞きながらも、結局はテーマを絞って助成することになる。どう絞っていくかが、私たち財団に勤める者の大きな課題となるわけである。



## 新刊紹介

『おかえりなさいツバメたち——都市に生きるツバメの生活』 唐沢孝一著  
大日本図書（子ども科学図書館）・刊  
B 5 変形判，36頁，1,200円

「都市鳥研究会」は3年前から、研究コンクールの受賞研究の一環として、皇居・丸の内・銀座を含む一帯のツバメ等のキメ細かい観察調査を続けてきた。コンクリートジャングルの中で、ツバメたちはどんな生活をしているのか。どんな所に、どんな材料で巣を作っているのか。街の人々はこのツバメとどんな係わりをもっているのか。本書にはこれらの興味深い観察結果が、美しい図と写真と文章で分りやすく綴られている。小学校中級以上の子ども向けの絵本であるが、実態調査を踏まえたオリジナリティの高い内容である。発見することの楽しさや難しさというものもよく描かれている。

『社会調査と数量化——国際比較におけるデータ解析——』

林知己夫・鈴木達三・著  
岩波書店・刊  
B 5 判，281頁，10,000円

著者たちのグループは、長年にわたって日本人の国民性調査を手がけてきており、数々の数量化の手法を開発してきた。そしてここ10年来は、その手法の国際比較研究への展開を図り、「連鎖的比較研究法」の確立に務めてきた。

質問紙調査による国際比較は、厳密に行おうとすれば数々の問題がある。著者等は事例研究を積み重ねつつ、その問題点を着実に克服してきた。本書はその成果を具体事例でもって解説した総集編とも言ふべきものであり、わが国の社会調査の水準を示す一里塚と言っても良いであろう。なお、本書の核心を成すアメリカの国民性調査は、当財団の研究助成によるものである。

『東京の橋——水辺の都市景観』

伊東 孝・著  
鹿島出版会・刊  
四六判，264頁，2,200円

橋は都市景観の中で、建築や公園などと同様に重要な要素であるが、これまでは単なる交通施設として以外には必ずしも十分に論じられてこなかった。そのような中で、著者等は5年前から「東京の橋研究会」を組織して、現存する橋梁の歴史的・景観的な価値について、鹿島学術振興財団や当財団の研究助成により実証的な調査を進めてきた。

本書はそれらの調査を踏まえながら、独自に書き下したものである。東京の橋の歴史と共に、その一つ一つにまつわるエピソードが多数の写真と共に語られている。橋からみた東京論としても面白い。

『タイ日辞典』

富田竹二郎・著  
養徳社・刊  
B 5 判，2,200頁，28,000円

本辞典は、わが国タイ語学の草分けで、第一人者でもある、富田氏の半世紀にわたるタイ語およびタイ文化研究の集大成として出版されるものであり、収録語句は5万語、例文・例句は3万にも及ぶ。

P. 3でも述べたように、この辞典の編纂・出版については、当財団の「隣プロ」助成が行われた。

『戦後日本の圧力団体』

村松岐夫・伊藤光利・辻中 豊・著  
東洋経済新報社・刊  
A 5 判，283頁，4,300円

本書は、1978・79年度の当財団研究助成により実施した252の利益団体の指導者に対する面接調査結果をもとにした圧力団体論である。

調査データとその分析から得られ(ア)

## 満1歳になった助成財団資料センター——“会員の集い”を開催——

日本における民間助成型財団の共同事業として一昨年11月に発足した助成財団資料センターは、現在85の団体が会員となっている。これまでに収集した資料については、助成・奨学・表彰などを行っている135団体に関する情報が含まれている。季刊の広報誌『助成財団』も近日中には第4号が発行される予定であり、ほぼ活動も軌道に乗ったといえる。

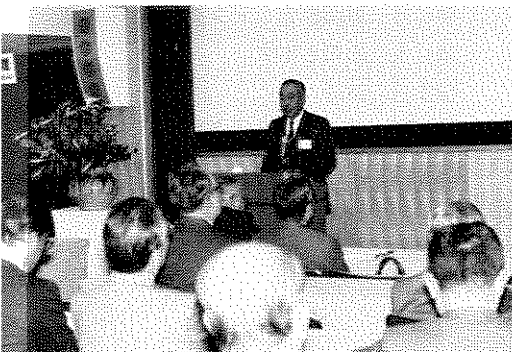
昨年11月21日には、国際文化会館講堂（東京・六本木）にて設立1周年を記念しての「会員の集い」が行われたが、会

経過報告を行う望月副理事長

員団体の関係者等およそ100名の出席があり、盛会となった。

午後3時30分に開会し、林理事長（トヨタ財団専務理事）の挨拶、橋本哲曙氏（総理府内閣総理大臣官房管理室長）の来賓挨拶に引き続き、望月信彰副理事長（日本生命財団専務理事）から一年間のセンターの活動に関する経過報告およびアメリカのFoundation Centerの活動内容の紹介などが行われた。さらに、民間財団等で多くの要職を兼務する向坊隆氏（元・東大総長）により「民間助成活動に期待するもの」と題する特別講演が行われた。

5時30分からは、会場を移して懇親パーティーが開かれ、日頃一堂に会する機会の少ない財団関係者の中で活発な交流が行われた。





(\ ) た主張を補強するために、他のソースからも種々の資料を得ており、それらのデータや情報に基づき、日本の圧力団体の活動を記述し分析している。これらの団体をセクター団体、政策受益団体、価値推進団体の三つに類型化することにより、圧力政治の構造の大筋を説明できると著者等は主張している。

**最近の報告書から**

当財団の助成研究から、「成果発表助成によって印刷された報告書を紹介します。入手ご希望の方は、送料分の切手を同封のうえ、財団レポート係宛てお申込み下さい。なお、品切れの際はご容赦願います。

I-019 ハシボソミズナギドリの大量斃死に関する総合的研究 (黒田長久・他、B-5 175頁 和文、送料 300円)

オーストラリア南東部で繁殖するハシボソミズナギドリは、3月頃に北太平洋に向かって飛立つが、5～6月頃に日本沿岸で大量斃死することが問題となってきた。当研究チームは、1982年秋から3年間にわたり、当財団の助成によって本格的な原因究明に着手し、その主な原因が繁殖地における幼鳥の栄養状態にあることをつきとめた。この報告書は、その原因究明に至る全過程の関連論文を収録したもので、学際的・国際的な共同研究の興味ある展開を知ることができる。

(P.4 寄稿参照)

I-020 Comparative Studies On the Utilization and Conservation of the natural Environment by Agro forestry Systems (森田学・他、B5 453頁 英文、送料 300円)

代表者等は、1982年以来3年間にわたり、日本・タイ・インドネシアのタウンヤ型アグロフォレストリーの比較研究を進めてきた。その研究の概要は、昨年4月の当財団第22回研究報告会で発表されたが、その後改めて共同者のワークショップを行って、最終レポートをまとめたのが本報告書である。自然環境の保全と

いう立場から農林複合経営の現状を分析し、その可能性と問題点を理論的に明らかにしようとしたものである。

I-021 特徴ある農村集落の環境保全からみた空間秩序形成に関する研究——特に武蔵野新田集落を例として—— (浦良一・他、B-5 189頁 和文 送料 300円)

東京の西北部30km圏に位置する三富新田は、都市化の波にさらされているが、江戸時代に開発された武蔵野新田の風情をまだよく残している。この報告書は、前半では三富新田の自然的・経済的・社会的・環境的諸条件を実態調査に即して考察し、後半では、高度の都市型農業を進展させ、武蔵野の景観を保全し、都市住民にアメニティを提供し得るような総合的保全開発方策を探求、提案している。

001 町並保存運動の展開と全国町並保存連盟の役割 (石川忠臣・他、B5 460頁 和文、送料 300円)

全国町並保存連盟は、全国各地の町並保存団体を会員とする民間団体であるが、各地の保存運動と連盟とは今後どう係わりあうのが望ましいかを検討するため、個別運動史の事例検討を行うことにした。この報告書は、1984年度に実施したその予備研究の成果をまとめたもので、妻籠宿、足助、大平宿の運動経緯を整理し、関連資料を収集している。巻末には関連年表と克明な新聞記事のリストが収録されている。

☆ ★ ☆

**映画 越後奥三面 銀賞に輝く!**

当財団の研究助成により成し遂げられた映画『越後奥三面一山に生かされた日々』(民族文化映像研究所作)は、昨年行われた第22回シカゴ国際映画祭・ドキュメンタリー部門にて銀賞を受賞した。研究所の皆様、おめでとございました。

**トヨタ財団レポート No.39**

このレポートを継続してご希望の方は、お葉書にて財団宛てお申し込みください。

**第23回研究報告会のご案内**

**高度技術社会における安全管理システム**

・日時: 1987年2月14日 (土)  
13:20~18:00  
・場所: (財) 日本都市センター・第一講堂  
(東京都千代田区平河町2-4-1)

**〔研究報告1〕**

『災害事例の総合的データ・バンク・システムの作成とその運用に関する研究』 防災都市計画研究所・村上處直

**〔研究報告2〕**

『航空におけるインシデント・リポート・システムに関する総合的研究』

航空法調査研究会・宮城雅子

**●参加ご希望の方へ**

住所・氏名・年齢・勤務先および連絡先の電話番号を明記の上、「トヨタ財団・研究報告会係」宛て、おハガキにてお申込み下さい。(2月10日必着)折り返し、詳しいプログラムをお送り致します。

**編集後記**

◆遅ればせながら、新年あけましておめでとございます。

今年の干支は卯。うさぎは、飛躍の象徴となっていますが、反面、大変臆病な動物としても知られています。

◆わが国にとって今年が、果たして飛躍の年となるか、あるいは内圧・外圧という臆病風に吹かれて身動きの出来ない状態となるかは、全く予断を許さない状況となっております。

◆こうした厳しさは、財団にとっても同じこと。それ故にこそ、むしろ亀の如く一步一步を地道にそして確実に歩んでいきたいと考えております。昨年同様、ご支援の程、何卒よろしくお願い致します。

発行日 1987年1月23日  
発行所 財団法人 トヨタ財団  
発行人 山口日出夫  
編集人 渡辺 元  
印刷 真友工芸株式会社